

サツマイモの町、川越の戦後



元・川越サツマイモ資料館 館長 いのうえ ひろし
井上 浩

はじめに

埼玉県中南部の城下町であった川越は、江戸時代後期から江戸・東京の焼きいも用サツマイモの産地としても有名になった。いも畑は武蔵野台地上の川越藩領の村々とそれに隣接する他領の村々にあった。今日の行政区画で言えば川越市、所沢市、狭山市、富士見市、ふじみ野市、志木市、和光市、朝霞市、三芳町^{みよし}にまたがる広大なものであった。

その中でサツマイモの質と量が共に抜群^{よし}であったのは、元禄期の川越藩主・柳沢吉保^{やす}が開いた藩営新田の「三富新田」^{さんとめ}であった。その初期入植者は、上富村^{かみとめ}（三芳町）143戸、中富村（所沢市）48戸、下富村（所沢市）50戸で、上富村が一番多かった。

紅赤と川越

江戸・東京の焼きいも屋向けの品種は「赤蔓」^{あかづる}と「青蔓」^{あおづる}であったが、明治の末ごろから「紅赤」^{べにあか}になった。それは埼玉県さいたま市の兼業農家の主婦、山田いちが1898(明治31)年に世に出したもので色・形・味の三拍子が揃って抜群のいもであった。そのかわり気むずかしくて作りにくく、単位面積当たりの収量が少なかった。坂井健吉氏の著書『さつまいも』(法政大学出版局、

1999年)によれば、「紅赤」にとっての最適収量は10a当たり約1 t 程度。むやみにそれ以上の増収をねらうと品質が落ちるとされている(199頁)。

それでも戦前の「紅赤」は青果市場で高値で取引されたから、農家にとっては作り甲斐のある良いいもであった。それが太平洋戦争による食糧難時代になると、消えてしまった。たとえば狭山市の『狭山市史通史編Ⅱ』(1955年)によれば、食糧統制時代における同市の農家へのサツマイモ供出割当は、10a当たりの基準収量を1760kgとしておこなわれた。いもの品種はなんでも構わなかったから、「金時」^{きんとき}と呼ばれていた「紅赤」を作る人はいなくなった。“金時”で750kg、「太白」が1100kgくらいの反収であったから、農民はこぞって多収品種の「沖縄100号」や「茨城1号」の種いもを奪い合うことになった。しかし、1760kgの反収を上げられるのは精農家に限られた。出征兵士のいる家庭や婦女子のみの家では、収量は当然これを下回った、とある。当時のサツマイモ作りは国が推奨した質より量の多収いもを使っても、なまやさしいものではなかったことがわかる。

ついでに言えば、東京の青果市場では「紅赤」のことを「金時」^{きんとき}と呼んでいた。“べに

あか”より、“きんとき”の方が語呂がよかったからであろう。それで市場関係者だけでなく農家も八百屋も消費者も、正式名の「紅赤」よりも、俗称の“金時”を使うようになった。戦後、「高系14号」の派生系統を“きんときなると金時”、“ごろうじまきんとき五郎島金時”、“きょうきんとき京金時”などと称する所が多くなったが、それは、高名な「紅赤」の俗称“金時”にあやかりとしたもののようである。

戦後の数年が過ぎて世の中がやや落ち着いてくると、川越いも産地に「紅赤」復活の動きがでた。だが、うまくいかなかった。農家はそれぞれの時代に一番合う作物を探し、それを作る。それまで冬作の中心作物であった麦類も、夏作の中心であったサツマイモも魅力のないものになり、畑は東京向けのハウレンソウ、小松菜、カブ、枝豆などの野菜で埋まっていった。サツマイモ畑は年々減少し、戦後70年たった今日ではそれを見つけるのが難しいほど少なくなっている。市場販売用のサツマイモを作る畑が残っているところは、三芳町上富地区と川越市内に点在するいも掘り観光農園ぐらとめいしか見当たらない。前者は20数戸で「富の川越いも振興会」を作り、がんばっている。その会員宅には若い後継者が揃っていて、やる気満々である。後者は戦後に始まった。後述するようにふとしたことから始まり、やがて川越観光の目玉になった。だが、1973（昭和48）年の石油危機以後、それも下火になった。それでも今もなお数戸が残ってがんばっている。

川越観光の目玉サツマイモ

サツマイモ畑が消えれば、サツマイモの町としての川越市の活力も消えるはずであ

る。だが、川越はしたたかである。かえってむかし以上にサツマイモの町として賑わい、有名になった。なぜか。

都心から電車で1時間弱でこられる川越は、江戸時代から江戸との交流が盛んな町であった。そこが太平洋戦争による戦災を受けずに済んだのと、戦後の高度経済成長期に多くの都市がおこなったような町の中心部の大改造をおこなわなかったのが幸いした。

川越は首都が失った江戸情緒を色濃く残している町として注目されるようになり、東京方面から気軽にくる観光客が次第に増えるようになった。最初はクチコミでくる人が多かったが、やがてマスコミ各社が川越の良さをさまざまな角度から盛んに取り上げてくれるようになった。おかげで昭和の終わりごろから観光客が急増した。

川越市観光課が観光客数の正式調査を始めたのは1982（昭和57）年からで、その年の観光客はすでに150万人にもなっていた。それが1992（平成4）年に355万人、2002（平成14）年に399万人、そして2012（平成24）年には623万人にもなった。

人口35万人の川越市に、年に600万人以上もの観光客がきてくれるようになり、埼玉県最大の観光地になった。観光客の多くはそこにしかないものや、その風土が感じられるものを求めたがる。江戸時代以来の長期間、サツマイモで有名であった川越にくる観光客にとって、食事ならいも料理、みやげ菓子ならいも菓子となるようである。業者はそういうことに敏感である。全国各地から優れたサツマイモを仕入れ、それでいも料理、いも菓子を作るようになった。加えて川越観光最大のポイントである

蔵造りの町並みから菓子屋横丁にかけての
一帯は、サツマイモ関連の商品を扱う店で
埋まっている。それだけではない、市内の
別のところにもそのような店が年々増えて
いる。わが国にそんな町はほかにない。だ
から観光客は、そのことだけでも満足する。
もっともそのような弾みがつくまでには、
さまざまなことがあった。そのおもなものを
振り返ってみたい。

いも掘り観光農園の坂本長治さん

今日の川越市で自家用以外の大きなサツ
マイモ畑といえば、数戸のいも掘り観光農
園にあるものしかない。その総面積も10数
haに過ぎない。だが、もしそれもなかつ
たなら、いもの町としての格好がつかなく
なってしまうのではなからうか。たとえわ
ずかでも川越市内にサツマイモ畑を残して
くれたのと、戦後いち早く川越観光の目玉
を作ってくれた恩人は、市内今福中台地区
の篤農家、坂本長治さんであった。

1908（明治41）年生まれの父親から坂本
さんに、「これからはお前がやれ」と身上
を渡されたのは日中戦争が始まった1937
（昭和12）年であった。畑作農家の坂本家
の農地は畑2haと茶畑30aであった。

戦争による食糧難時代、畑では麦類とサ
ツマイモの「沖縄100号」をつくった。サ
ツマイモの自由売買が認められるように
なった1950（昭和25）年以後も「沖縄100号」
を作り続けた。でん粉いもとして市内に
あったでん粉工場が買ってくれたからであ
る。

村中の農家がでん粉いもを作っていた
1953（昭和28）年のこと、坂本さんは「い
も掘り観光事業」に手を出すことになった。

筆まめな坂本さんは1989（平成1）年、81
歳のとき『坂本家代々之記録』（私家版）
を出された。その第4章第2項が「芋掘観
光事業の記録」になっている。またその翌
年には川越文化会主催の聞き書きの会に招
かれ、「いも掘り観光物語」を語られている。
それが同会刊『川越文化史第4巻』（1991年）
に収められている。また私は坂本さんのお
宅に数回お邪魔し、坂本さんの話を直接
伺っている。そこでそれらに拠りながら、
全国のいも掘り観光の模範になった川越の
いも掘り観光事業を紹介したい。

1953（昭和28）年の秋のこと、川越市役
所観光係の根生貞次郎さんが突然、坂本さ
んの家に来て、こう頼んだ。「東京のある
団体から川越でいも掘りをやりたい。人数
は50～60人で予算は1人50円。それでやら
せてくれる農家を紹介してもらえないかと
頼まれた。観光係にそのような依頼があつ
たのは初めてのことなので勝手がわからな
い。済まないがお宅でそれを引き受けても
らえないか」と。

軍隊時代からの友人である根生さんに頼
まれては、断わるわけにはいかなかった。
自家用の食用いもとして作っていた「太白」
を掘らせることにして計算してみると、1
人50円で15株も掘らせられることがわかつ
た。当時のでん粉いもの相場は10a当たり
で1万円であった。欲のない坂本さんは食
用いもも、10a当たり1万円になれば良い
とした。それでもでん粉いもより得になる
からであった。でん粉いもは農家が掘り、
掘ったいもは農家がでん粉工場まで運ばな
ければならなかった。それがいも掘り観光
ならお客さんがいもを掘り、掘ったいもは
お客さんが全部自宅に運んでくれるからで

ある。

その年、川越にきてくれた団体はそれ一つだけであったが、お客さんたちは大喜びで帰った。それを見て根生さんと坂本さんは話し合った。「もし東京の小学生や幼稚園児がいも掘りに団体で来てくれれば、川越の名物になるぞ」と。それで市役所の観光係がPRを担当し、坂本さんがそれ用のいも畑を用意することになった。

最初は坂本家のいも畑で間に合っていたがやがて足りなくなった。そこで近所で協力してくれる農家を次々に募り、10数戸でやることにした。川越のいも掘り観光の人氣が爆発的に出たのは1964（昭和39）年からであった。この年の秋、幼稚園児であっ

た皇太子、浩宮様が都下の農業試験場でいも掘りをされた。それをマスコミが大々的に報じたので、幼稚園でいも掘りをやらないところはないほどになったからである。

川越のいも掘り観光の絶頂期はその翌年の1965（昭和40）年から1972（昭和47）年にかけてで、その受け入れ戸数は20戸以上になった。またそこに来てくれる人数は、年に20万人にもなった。それが衰退し始めたのは、1973（昭和48）年の石油ショックからである。バス代が高騰し、遠方から毎年川越にきてくれていた団体客が減ったり、川越のいも掘り観光の成功を見て、関東各地にいも掘り観光農園が続々と誕生したからである。